

## (生きる 天島大輔さんの台湾訪問記：上)文字紡ぐ、 声なき会話 / 東京都

「医者から『本当に君が言っているのか?』と言われた」

重度の障害で四肢がまひし、自分では動くことも発話もできない天島(てんばた)大輔さん(31)＝武蔵野市。「あかさたな」から順に発音してもらい、体の一部をわずかに動かして反応する「あ・か・さ・た・な話法」で一文字一文字を紡ぎ出し、自分の意思を示すことができるが、それを信じてもらえなかった体験を通訳者を通して語った。

3月22日、台湾・台北市北西の新北市にある障害者施設。天島さんは、立命館大大学院の博士課程で研究する障害者のコミュニケーション方法についての調査のため、台中市在住の莊馥華(チョワンフーホワ)さん(29)と対面した。

莊さんも、天島さんと同じように四肢にまひがあり、話すことができない。こちらは発音と抑揚を1から8の数字の組み合わせで表す文字盤をもとに、顔や目の動きで数字を示して、文字を伝える。莊さんの意思を読み取る母の邱梅珍(チウメイチェン)さん(51)も「本当に娘さんの言っていることなのか、と疑われた」と応じた。

□ ■

天島さんが莊さんの存在を知り、会うことを熱望。台湾側の配慮で、ともに車いすの2人が会う場所としてこの施設が選ばれた。

莊さんの印象を尋ねられた天島さんは「かわいらし人だと思う」。それを聞いた莊さんは大きな笑顔を見せ、「いま日差しが強いところを(車いすで)歩いてきたが、日焼け止めをつけるのを忘れていた」とユーモアたっぷりに答えた。

2人とも色やものの存在は認識できるが、平面の文字は読めず、意思を通わせるには通訳者が必要だ。さらに中国語と日本語の通訳も入る。「会話」に

は時間を要したが、同じような苦難の道を切り開いてきただけに、すぐに打ち解けた。

□ ■

天島さんは14歳のときに急性糖尿病で心肺停止状態になって障害を負った。荘さんは10歳のときの火事で一酸化炭素中毒になったのが原因だ。2人とも当初は医師らに知的レベルも障害を負ったとされたが、意識は正常であることを、ともに母親が見抜き、独自のコミュニケーション方法を見つけた。

日本と台湾の障害者事情にも話は及んだ。荘さんから「台湾に来られてどうですか」と問われた天島さんは「車いすでひとりで出歩いている人が多く、バリアフリー度に驚いた」。

一方、邱さんは、天島さんが親を同行せず介助者とともに現れたことに驚き、「台湾では家族や親しい人が通訳の役目をする。障害者のための介護システムがまだできていないので、それを社会に訴えていきたい」と話した。

台北市内のホテルに戻って、直接天島さんに感想を聞いてみた。天島さんの手を握り、「あ、か、さ……」とゆっくりと声を出すと、「は」のときに強い引きを感じた。「は、ひ、ふ……」。次の音がなかなか定まらない。何度か繰り返して「は」とわかった。

同じ作業を何度も繰り返し、「は・や・さ」まで来たが、次の音を何度も探すうちに、それまでの3文字を忘れてしまった。「あれ、何だったっけ?」。天島さんが笑い出した。

介助者に3文字を教えてもらって続けること20分近く、やっと「は・や・さ・に・お・ど・ろ・い・た」と文字を拾うことができた。荘さんが母親とコミュニケーションをとるときのスピードについての感想だったが、天島さんと文字を紡ぎ出し、「会話」することがいかに大変なことかを実感した。

午前0時過ぎ、天島さんは介助者の助けを借りてツイッターにつづった。「馥華さんへのインタビューも無事に終わりました！ みなさんの熱烈な歓迎に感激し、台湾にきた意味がありました！！ 謝謝！！」

◇

生きるためには24時間の介助が必要な天畠さんの3泊4日の台湾訪問に同行した。

(編集委員・大久保真紀)